

# 2026年3月期 通期業績予想の修正 説明資料

Kudan株式会社（東証グロース：4425）  
2025年10月31日

- 成長戦略となる「HWパッケージの活用」「SW技術の拡張」が順調に進捗し、多角的に売上が伸長<sup>1</sup>。受注済み政府案件の会計処理確定により、通期業績予想を上方修正<sup>2</sup>
  - **通期売上は7億円から9.2~10.2億円に上方修正**（修正前比+31~46%/前期比+80~100%）
  - 今期下期から収益性改善が大きく進むため、**通期の調整後利益<sup>3</sup>は-7.2億円から-7.2~-6.8億円への改善**にとどまるも、**期末時点<sup>4</sup>の調整後利益<sup>3</sup>は-5.9億円から-5.2~-4.8億円へとより大幅に改善**
  - その結果、**来期の調整後利益<sup>3</sup>は-3.5~-4億円へと赤字圧縮が加速**（詳細はP5参照）

| 2026年3月期の業績予想 [百万円]                          |      |           |                                                                           |
|----------------------------------------------|------|-----------|---------------------------------------------------------------------------|
|                                              | 修正前  | 修正後       |                                                                           |
| 売上高                                          | 700  | 920~1020  | ・ デジタルツイン向けに販売増（+150~250百万円）<br>・ ロボット向けに政府案件の受注上振れ <sup>5</sup> （+70百万円） |
| 営業利益                                         | △780 | △770~△730 | ・ デジタルツイン売上増による利益増は進捗（+80~120百万円）<br>・ コスト低減の遅延により当期利益影響は限定的にとどまる         |
| 調整後営業利益 <sup>3</sup>                         | △720 | △720~△680 |                                                                           |
| 調整後営業利益 <sup>3</sup><br>（期末時点 <sup>4</sup> ） | △590 | △520~△480 | ・ コスト低減は今期中に達成予定のため、期末時点では収益性を大幅に改善し、来期は通期で赤字圧縮が加速                        |

1. 過去資料 2025年3月期 通期決算説明資料のP12~15を参照（本資料の補足にて再掲）

2. 大型の政府案件の受注が確定して以降、今期業績への反映の精査を継続しており、現時点で委託側からの承認・支払いプロセスが進捗したことにより、会計処理の見通しが確定

3. 営業利益（損失）に毎期経常的に発生する政府からの研究開発補助金収入を加えた、事業収益性の指標となる利益数値

4. 各期末月時点での費用実績及び見込を12か月換算したもの

5. 期首時点で予想の売上から上方修正であり、個別案件の受注額とは異なる

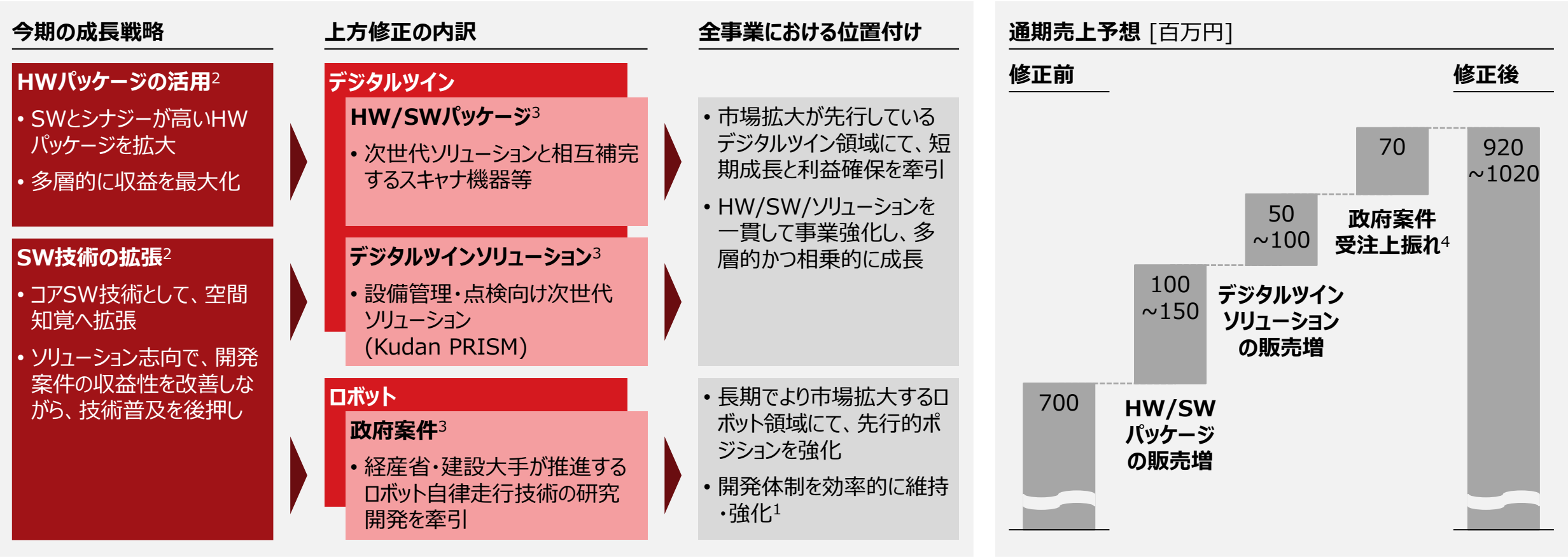
2

# 通期業績予想の修正 – 売上の伸長

- デジタルツイン向けとロボット向けの双方で多角的に売上が伸長
- デジタルツイン向けではシナジー最大化と短期利益の確保、ロボット向けでは開発体制と中長期の競争力の強化<sup>1</sup>に寄与

成長戦略に合致した領域において順調に売上が伸長し...

売上の上方修正（+31~46%）を見込む



1. 研究開発費用に対応した売上が充当され、開発に係る実質的なコスト負担を効率化することで体制を維持・強化

2. 過去資料 2025年3月期 通期決算説明資料のP12~15を参照（本資料の補足にて再掲）

3. 過去資料 2026年3月期 1Q決算説明資料のP7~10を参照（本資料の補足にて再掲）

4. 期首時点で予想の売上から上方修正であり、個別案件の受注額とは異なる

3

# 通期業績予想の修正 – コスト構造の改善

- 構造的な定常コストの低減に向けて、固定費低減と開発最適化を通期で推進<sup>1</sup>
- 期首時点の計画に対しては遅延あるものの、期末に向けては計画通りにコスト低減を達成する見込み

## 構造的な定常コスト低減 に向けた今期の施策<sup>1</sup>

### 固定費 削減

- ・組織最適化による  
固定費の削減  
(150百万円)

### 開発費 最適化

- ・コア技術以外の  
開発の凍結・外注化  
(50百万円)

## 今期の固定コスト等<sup>1</sup>の推移（年間換算<sup>2</sup>） [百万円]

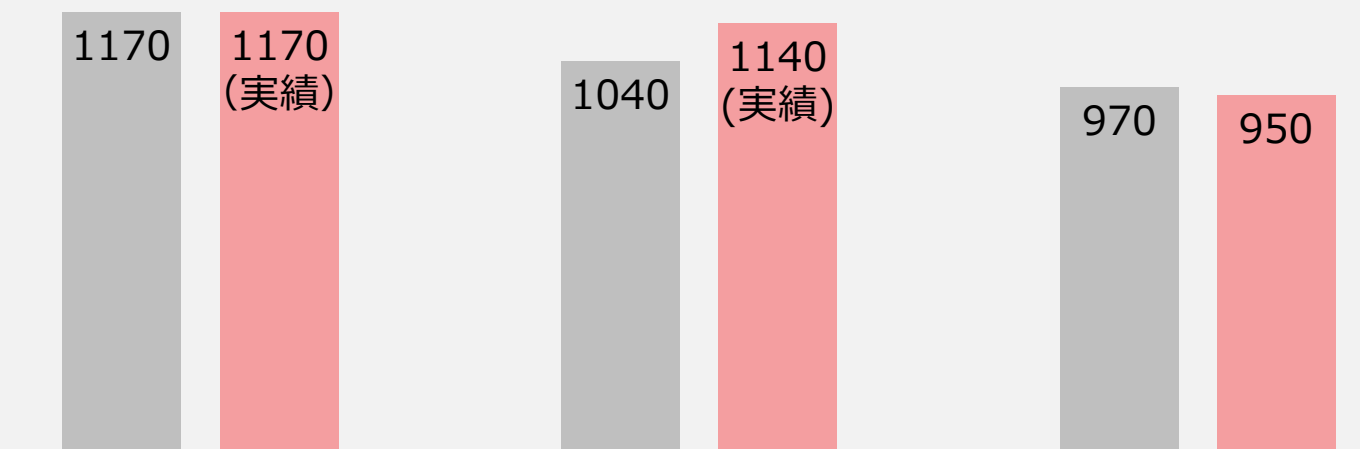
期首時点

期中（2Q末時点）

期末時点<sup>3</sup>

コスト低減の進捗に遅延が発生しているが...

今期中には当初計画に追いつく予定



1. 過去資料 2025年3月期 通期決算説明資料のP16を参照

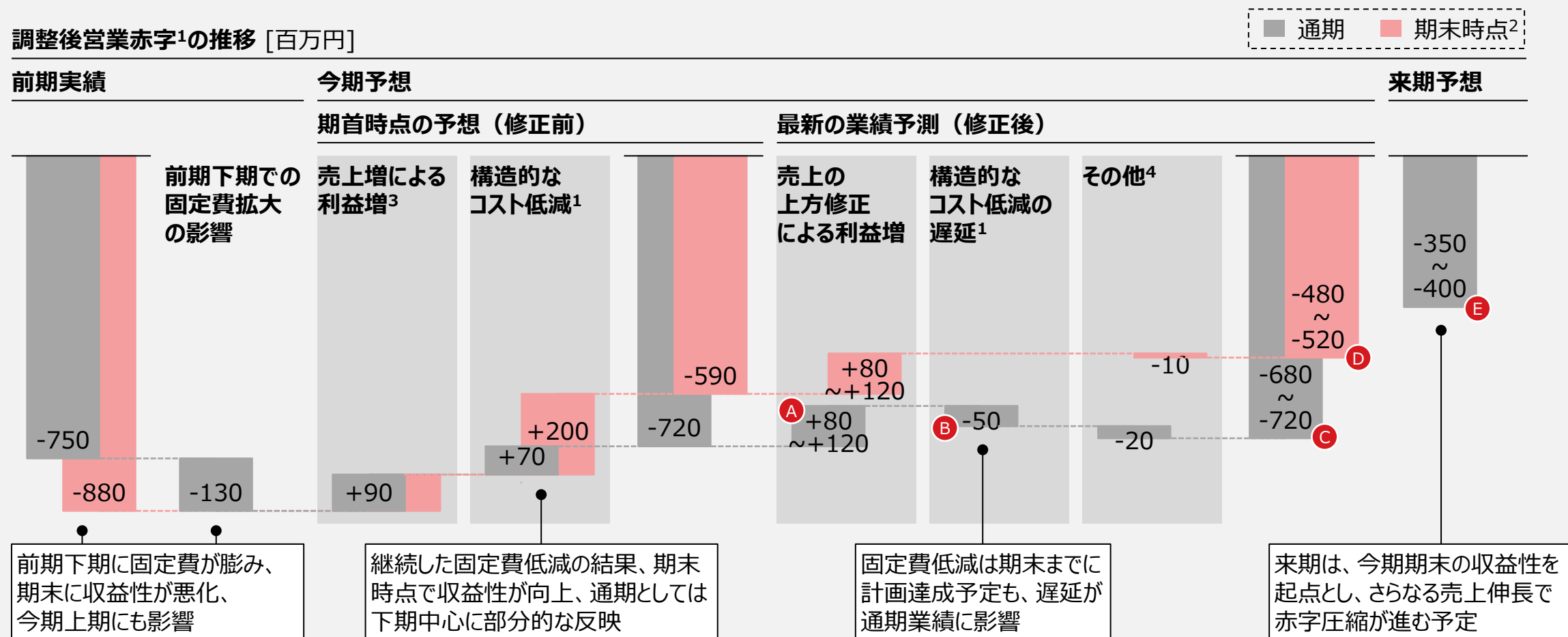
2. 販管費のうち一時的な費用を除いたもの。開発費を含む。

3. 各時点での費用実績及び見込を12か月換算したもの

# 通期業績予想の修正 – 赤字改善の見通し

- **A** 売上上方修正による利益増 (+0.8~1.2億円) するも、**B** コスト低減の遅延<sup>1</sup>等により **C** 通期利益の修正は限定的 (+0~0.4億円)
- 一方、固定費を中心としたコスト低減は今期中に完了するため、**D** 期末時点で収益性<sup>2</sup>は大きく改善され、そこを起点に **E** 来期は通期でも大きな赤字圧縮 (+3~3.5億円) を見込み、黒字化への道筋が明確化

調整後営業赤字<sup>1</sup>の推移 [百万円]



1. 本資料P4に詳細記載  
2. 期末時点の収益体質であり、通期売上・補助金収入から期末時点のコスト水準を控除して算定

3. 補助金増額 (10百万円) も含む  
4. 為替影響やその他経費など



## 補足資料（過去の関連資料再掲）

# 今期の取り組み

- 新技術・補完技術を拡大し、より幅広い技術群としての空間知覚（Spatial Perception）の提供を開始、開発案件の売上・収益強化を目指す
- 事業リバランスによる一過性費用の解消として、空間知覚への選択と集中によるコスト最適化と売上拡大に注力し、営業損益・CFの大幅改善を見込む

|             | 成長性・収益性の改善での狙い                                                                                                     | 前期の対応策                                                                                                                                                                                          | 今期の取り組み                                                                               |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 成長戦略の更新     | <ul style="list-style-type: none"><li>先進的な顧客製品の普及速度を反映し、開発案件の売上・収益を強化</li><li>加えて、市場加速の後押しと、案件毎の売上拡大を見込む</li></ul> | <ul style="list-style-type: none"><li>空間知覚（Spatial Perception）への拡張<ul style="list-style-type: none"><li>A コアSW技術の拡大</li><li>B SW/HWパッケージの拡張</li></ul></li><li>組織体制の構築</li><li>先行開発の着手</li></ul> | <ul style="list-style-type: none"><li>開発の継続・強化</li><li>案件化によるマネタイズ</li></ul>          |
| コスト最適化・収益改善 | <ul style="list-style-type: none"><li>技術領域の拡張を目指す新たな成長戦略のもと、組織・開発ポートフォリオを中心に事業構造を修正</li></ul>                      | <ul style="list-style-type: none"><li>注力案件のリバランスにともなう組織・開発の人員強化</li></ul>                                                                                                                       | <ul style="list-style-type: none"><li>C 成長戦略のもと、選択と集中を行い、一過性コストを解消しながら収益を改善</li></ul> |

# A 成長戦略アップデート（1/2）：空間知覚への技術拡張

- コアSW技術として、人工知覚（AP）に人工知能（AI）を取り込み、空間知覚（Spatial Perception）に拡張
- ソリューション志向を強め、開発フェーズでの収益性も改善しながら、普及速度の高い顧客製品を後押し

## 人工知覚 (Artificial Perception)

既存

- ・直感的な空間認識  
(機械の眼)



## 人工知能 (Artificial Intelligence)

新規

- ・データ学習によるパターン認識  
(機械の脳)



## 空間知覚 (Spatial Perception)

新規

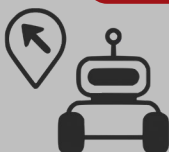
- ・従来の独自技術（SLAM）の強みを維持・活用しつつ、3D空間認識向けの技術群に領域を拡大
- ・ロボティクスとデジタルツイン向けのソリューション毎に技術連携し機能を相互効率化

Localization and Mapping<sup>1</sup>

既存

Robotic navigation<sup>3</sup>

新規

Semantic 3D recognition<sup>2</sup>

新規

Photo-real 3D representation<sup>4</sup>

新規



**既存** 従来のコア技術：継続して強みを維持・発展

**新規** 新たな技術領域：人工知覚との融合シナジーを創出する手法で拡大

- ・拡大した技術領域による高い付加価値の提供で、開発案件の売上・収益を強化
- ・ソリューション向けの技術応用を効果的に支援することで、市場加速を後押し
- ・案件毎の売上拡大を見込む
- ・前期から組織体制の構築や先行開発に着手、今期大型案件化を予定（coming soon）

1. SLAMなどに関連した自己位置推定と環境地図生成  
2. 3Dデータ・地図の物体認識・セグメンテーション・意味合い抽出

3. ルート計画・障害物回避などの自律移動ナビゲーション  
4. Novel View Synthesisなどによる3Dデータ・地図の写実的表示

## B 成長戦略アップデート（2/2）：SW/HWパッケージの拡大

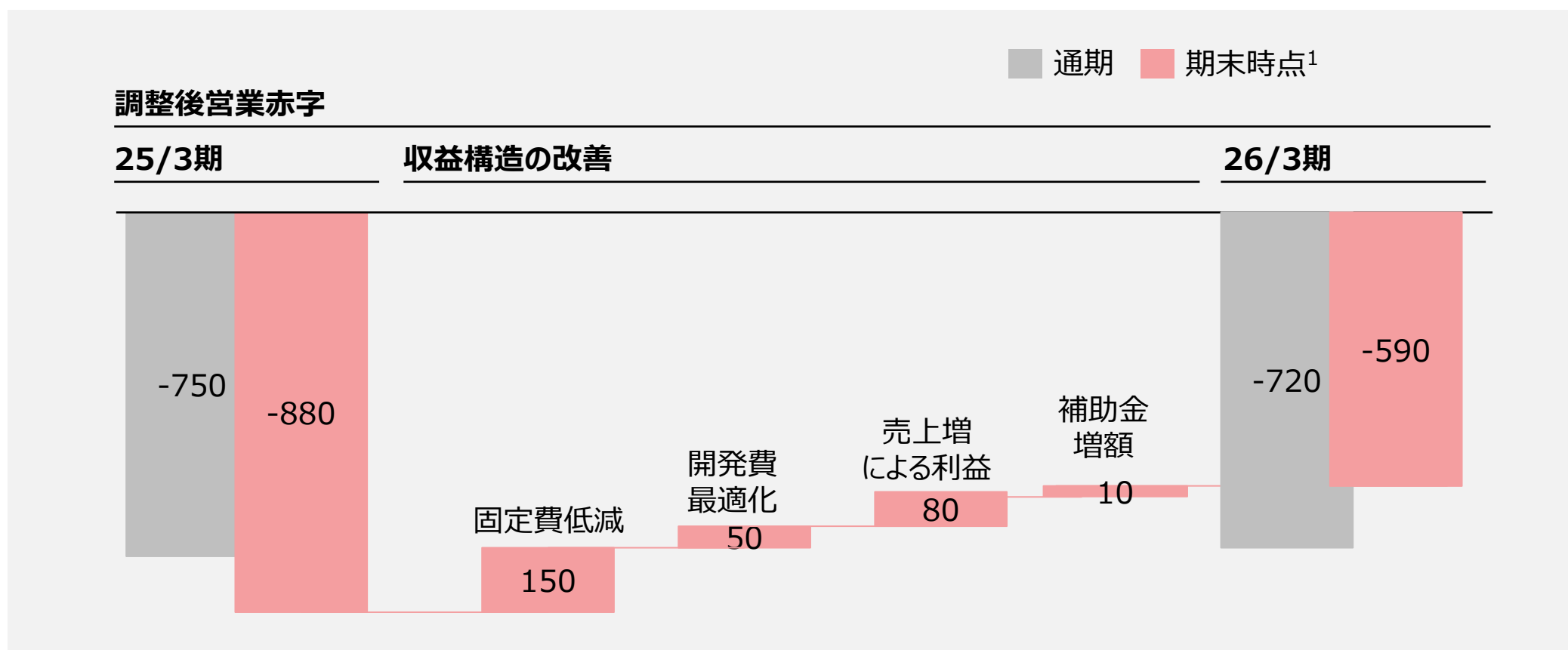
- SW事業をコア<sup>1</sup>とし、技術・販売でシナジーが高い組込みSW/HWパッケージや補完SW/HWパッケージを拡大
- HW要素は社外技術を活用し、より多層的な事業を構成し、売上・利益の最大化を目指す

|                       | パッケージ構成                                                                                                                                                                                                                                  | 開発向け                                                                                                      | 商用向け                                                                                                |
|-----------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 組込み<br>SW/HW<br>パッケージ | <ul style="list-style-type: none"> <li>HWをSWに統合して最適化</li> </ul>        | <ul style="list-style-type: none"> <li>センサ・プロセッサと統合した開発用パッケージ（MMDK/MRDK）</li> </ul>                       | <ul style="list-style-type: none"> <li>量産向け実用的パッケージングと運用のためのユーザインターフェースの提供</li> </ul> <div>新規</div> |
| 補完<br>SW/HW<br>パッケージ  | <ul style="list-style-type: none"> <li>独立したSWとHWが相互補完</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>独自SW技術との互換性が確保された、社外HWパッケージ（例：3Dスキャナ／ロボットコントローラ）を合わせて提供</li> </ul> | <div>新規</div>                                                                                       |

- SW/HW最適化による技術的競争力の向上や、関連HWの需要捕捉で案件の売上・収益を強化
- 社外調達するHW要素とあわせて十分な利益率を確保（50%超を想定）
- 開発向けパッケージに加えて、商用向けパッケージも拡張
- 今期デジタルツイン向けを中心に伸長予定

## C 収益構造の改善

- 組織の最適化による固定費の削減（1.5億）、コア技術以外の開発の凍結・外注化（0.5億）、売上増による利益貢献（0.8億）、補助金増額見込（0.1億）
- 今期末時点<sup>1</sup>までに実力値で赤字幅を改善（2.9億）、来期以降の更なる赤字幅縮小・黒字化を目指す



1. 期末時点の収益体質であり、通期売上・補助金収入から期末時点のコスト水準を控除して算定

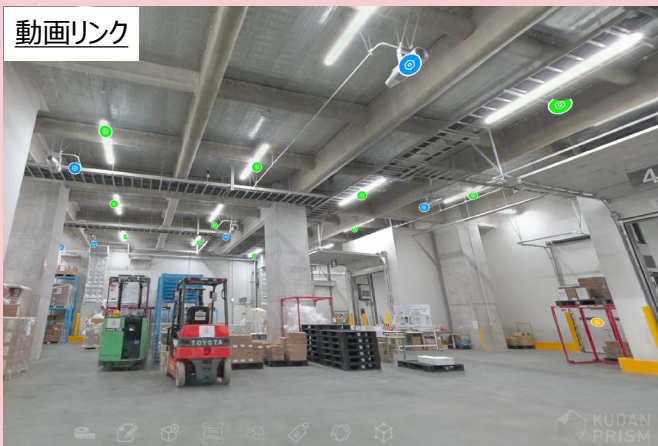
## B デジタルツイン向け案件（1/2）

- SWソリューションとHWパッケージを組み合わせた革新性の高い技術・製品ポートフォリオで、新規市場需要を開拓し1Q業績の成長に大きく寄与

新規リリース（次ページ詳細）

### デジタルツイン ソリューション (Kudan PRISM<sup>1</sup>)

動画リンク



- フォトリアル表示とセマンティック3D認識の融合によってデジタルツインの活用に革新をもたらす世界初<sup>2</sup>の次世代ソリューション
- 欧州<sup>3</sup>・日本にて、設備管理・点検・保守等で効果を市場検証済、今期の本格展開と商用ユーザー拡大を進める
- 土木建設・不動産・インフラ・物流・製造向けに市場急拡大の予想（2040年に100兆円超<sup>4</sup>）

### 3Dスキャナ (XGRIDS)



- Kudan PRISMと相互補完するスキャナ機器（高精度なデータを生成）
- 高性能かつ低価格で高い競争力を持ち、特にフォトリアル表示の実用化で世界市場を牽引
- 前期よりXGRIDS社との戦略的提携<sup>5</sup>を拡大して急成長中

- 技術と販売の双方で高いシナジーを発揮、結果として1Qの売上増に大きく寄与
- 新規性が非常に高く、新たに市場需要を開拓
- 世界市場展開で高い成長ポテンシャル

1. PRISM : Photo-Realistic Integrated Spatial Management（フォトリアル統合型空間管理）  
 2. フォトリアル表示とセマンティック3D認識を融合した設備管理向けソリューションの実用化、2025年6月当社調べ  
 3. 欧州にて拡大するアセットマネジメント（設備管理）での取り組みの一例（[参照リンク](#)）

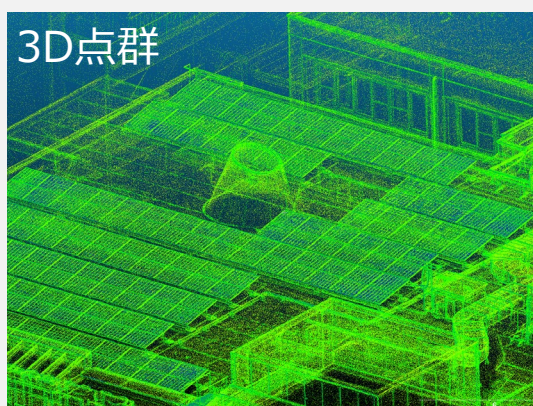
4. 各調査機関（Verdantix, IMARC, MRFR 等）による成長率（CAGR 20~40%）をもとに、2040年にはデジタルツイン市場全体が100兆円（約7,000億ドル）規模に達すると推計される。  
 5. XGRIDS社との事業提携（[参照リンク](#)）

## B デジタルツイン向け案件（2/2）－ Kudan PRISM詳細

- 社会需要が非常に高いものの、従来手法では実用化に制約があった分野に対し、Kudan PRISMは革新的な技術手法を導入し、ソリューションの実用化と普及を目指す

### Kudan PRISMによる革新的な技術手法のソリューション化

従来手法



- 3D点群中心のデータの使用
- AI認識の精度の低さ、データの容量・取り扱いの難しさ、既存システムとの連携の難しさ、などに課題
- 実用化が限定的

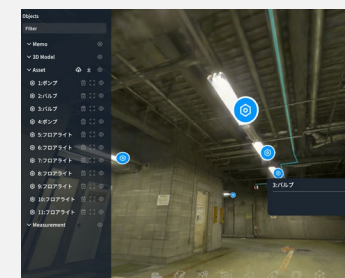
Kudan  
PRISM  
による  
革新技术



- 3D点群に加えて、フォトリアル表示を3D合成
- 更に、セマンティック3D認識で、AI活用が飛躍的に拡大
- データ利用・連携が効率化
- 実用化の拡大が見込まれる

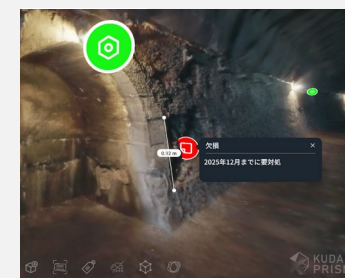
### 幅広い産業DXに活用（一部事例を抜粋）

施設・  
設備管理



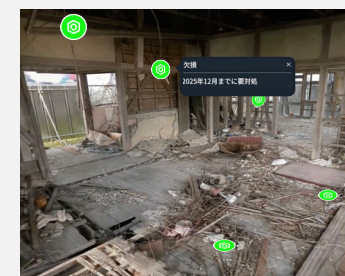
- 従来困難となっていた領域でのDX促進により、業務自動化・効率化や作業の遠隔化を実現

インフラ  
点検保守



- 先進国に共通する現場労働力の不足、設備インフラの老朽化の解消に向けて需要が拡大

スマート  
シティ・  
災害対応



- 需要が高まる災害シミュレーション・防災設計を高度化し、人命保護・災害復興に貢献

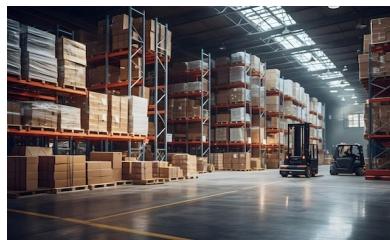
# ロボット自律走行パッケージ（1/2）

- 技術領域を拡大して、案件の大型化と社会実装の早期化を目指し、グローバルで複数案件を推進中

## 潜在的な巨大市場に対して、技術的なチャレンジが存在



### 頻繁な環境変化



### 大量の移動物・人



### 屋内外混合



### 特徴が少ない環境



### 複雑な立体構造や起伏



### オープンスペース（屋内）



## これまでの実績をもとに、技術領域を拡大して取り組む

- これまで、中核技術である独自の人工知覚（自己位置推定 & 環境地図生成）により、従来困難だったケースの顧客製品化を達成

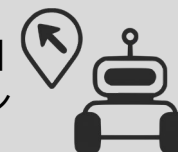


- 加えて、自律走行に必要な補完技術（SW）をパッケージし、より広範な顧客層への提供と効率的な開発の実現を目指す

**自己位置推定 & 環境地図生成**  
（ナビゲーション  
の中核的要素）



**ロボット自律走行  
ナビゲーション**  
（ルート計画・衝突回  
避などを含むナビゲーシ  
ョンのフルスタック）



- 米国・アジアなどのロボット企業と複数案件を推進中

# © ロボット自律走行パッケージ（2/2）－ 政府プロジェクトへの参画



- ロボティクス向けには、経産省が推進し建設業界大手が参画するソフトウェア開発事業に開発リーダー<sup>1</sup>として採択され、日本におけるロボット自律走行のコア技術開発の牽引を担う

## 背景となる日本の国策

- ・ 人材不足は社会課題として深刻化しており、ロボット導入は不可欠な対応として、政府と産業界は施策を強化
- ・ 特にこれまで導入困難だった市場においては、ロボットの自律性を高める技術革新が必須

### 経済産業省資料抜粋

#### AIロボットによる社会課題への対応

- ・ 日本における構造的・慢性的な人手不足は、地域の生活必需サービス等で顕著に。深刻な供給制約社会の到来が見込まれることから、ロボット導入が不可欠。
- ・ サービス分野等のロボット導入が困難だった市場（少量多品種市場）においては、  
①多様な動作の実現、②人と接する複雑な環境への対応が不可欠。
- ・ そのためには、ロボットの開発の柔軟性と判断・動作の自律性を革新させる取組が必要。



## 事業概要

- ・ 課題の大きい建設向けをモデルケースとして取り組み、ゼネコン大手各社が加盟する建設RXコンソーシアム<sup>2</sup>と建設業界横断で推進
- ・ 汎用的なロボット自律走行技術の確立を目指し、将来的にはより幅広い産業<sup>3</sup>に対する応用展開を見込む

## 当社の役割と今後への期待

- ・ 技術と実績を認められ、中核となるソフトウェアリーダー<sup>1</sup>として採択
- ・ 当社技術の社会実装・普及の加速を見込む
- ・ 関連するロボット関連の政府方針についても継続した緊密な連携を目指す

### 建設現場で活用される自律走行ロボットのイメージ



### 公募元

NEDO（国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合研究機構）

### 事業名

ポスト5G情報通信システム基盤強化研究開発事業／ロボティクス分野におけるソフトウェア開発基盤構築

### 採択テーマ

建設市場のロボティクス分野におけるソフトウェア開発基盤の研究開発

### 実施期間

2025年度～2027年度予定

### 全体予算

103億円（3年間合計）

1. ロボット自律走行を実現するためのソフトウェアモジュールの開発を主導（計画策定・進行、中核技術の設計と開発、参画企業らの開発成果の統合）  
 2. 建設業界が抱える就労人口の減少、生産性・安全性の向上などの諸課題の解決に向け、施工ロボットやIoTアプリ等の開発と利用に係るロボティクストランスフォーメーション（ロボット変革）を推進すべく設立した民間団体  
 3. 物流・製造・インフラ管理・農業など幅広い産業への波及的な展開にも期待

## 本資料の取り扱いについて

本資料は、当社の事業および業界動向に加えて、当社による現在の予定、推定、見込みまたは予想に基づいた将来の展望についても言及しています。

これらの将来の展望に関する表明は、様々なリスクや不確実性がつきまっています。

すでに知られたもしくは知られていないリスク、不確実性、その他の要因が、将来の展望に対する表明に含まれる事柄と異なる結果を引き起こさないとも限りません。

当社は、将来の展望に対する表明、予想が正しいと約束することはできず、結果は将来の展望と著しく異なることもありえます。

本資料における将来の展望に関する表明は、現時点において、利用可能な情報に基づいて、当社によりなされたものであり、将来の出来事や状況を反映して、将来の展望に関するいかなる表明の記載をも更新し、変更するものではありません。

本資料に記載されている当社以外の企業等に関する情報及び第三者の作成に係る情報は、公開情報等から引用したものであり、そのデータ・指標等の正確性・適切性等について、当社は独自の検証は行っておらず、何らその責任を負うことはできません。